

ルカによる福音書11章5-13節 「求める祈り」

1A 友達のしつこさ 5-8

1B 旅人へのもてなし 5-6

2B 家の中に起こる騒ぎ 7-8

2A 求めることへの約束 9-10

1B 願うこと

2B 求めること

3B 叩くこと

3A 良い賜物 11-13

1B 肉の父 11-12

2B 天からの聖霊 13

1C バプテスマを受けたイエス

2C 悔い改めた者の受ける約束

3C イエスの証し

本文

ルカによる福音書 11 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、10 章まで来ましたが、午後に 11 章を一節ずつ見ていきます。今朝は、5 節から 13 節に注目します。「5 また、イエスはこう言われた。「あなたがたのうちのだれかに友だちがいて、その人のところに真夜中に行き、次のように言ったとします。『友よ、パンを三つ貸してくれないか。6 友人が旅の途中、私のところに来たのだが、出してやるものがないのだ。』7 すると、その友だちは家の中からこう答えるでしょう。『面倒をかけないでほしい。もう戸を閉めてしまったし、子どもたちも私と一緒に床に入っている。起きて、何かをあげることはできない。』8 あなたがたに言います。この人は、友だちだからというだけでは、起きて何かをあげることはしないでしょう。しかし、友だちのしつこさのゆえなら起き上がり、必要なものを何でもあげるでしょう。9 ですから、あなたがたに言います。求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。10 だれでも、求める者は手に入れ、探す者は見出し、たたく者には開かれます。11 あなたがたの中で、子どもが魚を求めているのに、魚の代わりに蛇を与えるような父親がいるでしょうか。12 卵を求めているのに、サソリを与えるような父親がいるでしょうか。13 ですから、あなたがたは悪い者であっても、自分の子どもたちには良いものを与えることを知っています。それならなおのこと、天の父はご自分に求める者たちに聖霊を与えてくださいます。」

私たちは、弟子として生きていくイエス様の教えを見えていますね。今朝は今、読みました、祈り求めることについて見ていくこととなります。この話は、イエス様が祈られていた時に、弟子たちが

やって来て、祈ることを教えてくださいと頼んだので、イエス様が教えておられる場面です。2-4 節に、主の祈りと同じ内容のことが書いています。「2 父よ、御名が聖なるものとされますように。御国が来ますように。3 私たちの日ごとの糧を、毎日お与えください。4 私たちの罪をお赦してください。私たちも私たちに負い目のある者をみな赦します。私たちを試みにあわせないでください。」そして、祈る時の姿勢について 5 節以降で語っておられます。

1A 友達のしつこさ 5-8

私たちは、時々、誤った考えを持ってしまいます。「神がすでにご計画があり、御心を持っておられるのに、なぜ祈る必要があるのか？」ということです。すでに神がやると決めておられるならば、祈り願っても、願わなくても、どうせその通りになるのだから、私たちが何か働きかけなくてもいいのでは？と誤ってしまいがちです。けれども、そこには大きな誤った前提があります。誤った前提、間違った前提とは、「祈りによって、神の御心を変える」というものです。神があることを考えておられて、それをやめさせたり、変えるために私たちは祈り求めるのだと思っていることです。だから、そんなことはできないと分かっているのだから、なぜ敢えて祈る必要があるのだ？となってしまうのです。

そこで、それが間違っていることが、ここの箇所からよく分かるのです。祈りについて、何かお守りをお願いをかけるように、自分の願いが聞かれることが目的ではないのです。主の祈りから始まりますが、「父よ」と呼びかけているように、父としての神に呼びかけています。そして 5 節から 8 節には、友達に対して必死に頼み込んでいる人の話が出て来ます。そして 9 節と 10 節では、やはり子が父に願うことが譬えになっています。ですから、ここは何か願いが聞かれるか、そうでないか、ということではなく、関係性なのです。父なる方が私たちの願うことによって、父はその願いを聞かれることによって、ご自身が慈悲深い方、子を思うように慕っておられることを示したいのです。父を知ってほしいと願われているのです。自分の願いが聞かれるということであれば、「自分」が中心ですが、父が聞いてくださるということであれば「父なる神」が中心であり、その方が私たちの祈り求めていることに応えてくださることによって、この方が私たちをこよなく愛しておられることを示すことができます。「ヨハ 14:13 またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは、何でもそれをしてあげます。父が子によって栄光をお受けになるためです。」イエスの名によって祈り、その祈りが聞かれれば、イエス様によって父なる神に栄光が与えられます。

友だちもそうです。イエス様はご自身を後に弟子たちに対して友であると言われましたが、アブラハムは「神の友」と呼ばれましたが、友であれば語り合います。やはり、祈りの中で友なるイエス様の姿が見えてくるのです。

そして、私たちは祈ることによって、自分は人間であり、神ではないことを深く知ります。もちろん、私は自分を神だと思っていない！と反論されるかもしれませんが。けれども、祈らないと、自分があ

たかも神を必要としない、自分で生きている存在だと高ぶります。祈ることは、自分には何もできない、また知恵が欠けていることを告白しているも同然です。祈ることによって、私たちに必要なへりくだりが与えられるのです。アサという王がユダにいました。彼は主を求め、善い王さまでした。ところが晩年、戦いを敵にしかけられた時に、主なる神ではなく、外国であるアラムに金銭を払って、その敵を倒してもらうようにしました。主に頼り頼みませんでしたね？と預言者に言われた時に、彼は怒って、彼を牢獄に入れました。そして彼は病気にかかりました。「Ⅱ歴代 16:12 それは非常に重かったが、その病気の中でさえ、彼は主を求めず、医者求めた。」とあります。祈り求めることは、主にのみ救いがあることを告白することに他なりません。

1B 旅人へのもてなし 5-6

それで、イエス様は、私たちに祈られることを教えられます。初めに警えを語られますが、友達がしつこくお願いしてくる話です。

5 また、イエスはこう言われた。「あなたがたのうちのだれかに友だちがいて、その人のところに真夜中に行き、次のように言ったとします。『友よ、パンを三つ貸してくれないか。6 友人が旅の途中、私のところに来たのだが、出してやるものがないのだ。』

ここには、私たちには分からない、全く異なった環境が二つ書かれています。一つは、もてなしの文化です。旅人がやってきた時に、その人を迎え入れることは当時、最もしなければいけないことの一つでした。これは歪んだ、行き過ぎた状況でしたが、ロトのところには御使い二人が旅人の姿でやって来て、彼らを凌辱したいと思った男たちがやってきました。ロトは、旅人を守るために、なんとまだ結婚していない娘を与えるといっている場面があります。これは恐ろしいことですが、けれどもそれだけ旅人をもてなすことは最重要課題でした。ヘブル人への手紙でも、「13:2 旅人をもてなすことを忘れてはいけません。ある人たちは、知らずに御使いたちをもてなしました。」とあります。

そしてもう一つ、パンを貸してくれないか？と言っていることです。イエス様が先に、「私たちの日ごとの糧を、毎日お与えください。」と言われましたね。それは比喩的なことではなく、切実な日々の課題だったのです。イスラエルがかつて、荒野の旅で朝ごとにマナが降りて来て、それで生きていましたが、彼らは日々の糧の祈りを真剣に行なわないといけなような状況でした。ですから、私たちにとってパンは、三つだったらあげればよいものと思うのですが、彼らにとっては貴重だったのです。

2B 家の中に起こる騒ぎ 7-8

7 すると、その友だちは家の中からこう答えるでしょう。『面倒をかけたでほしい。もう戸を閉めてしまったし、子どもたちも私と一緒に床に入っている。起きて、何かをあげることはできない。』8 あなたがたに言います。この人は、友だちだからというだけでは、起きて何かをあげることはしない

でしょう。しかし、友だちのしつこさのゆえなら起き上がり、必要なものを何でもあげてください。

こども、私たちにはなかなか、理解するのが難しい箇所です。まず、「もう戸を閉めてしまった」とあります。私たちは、ただ鍵で戸を開ければいいだけですが、当時はおそらく、そうした鍵の技術はなく、開け閉めをするのに結構、面倒くさかったのだと思います。また音も大きく出るし、近所迷惑にもなります。そして、「子どもたちも私と一緒に床に入っている。起きて、何かをあげることはできない。」とあります。アメリカの家だと、ぴんと来ませんが、日本の家庭なら、添い寝をするから、少し理解できるかもしれませんね。けれども、本当の意味では理解できません。なぜなら、当時、家屋というのは多くが洞穴でした。そして、居間も寝室も同じところでした。親がもっと奥に寝ていれば、子供たちが戸のほうに寝ているのであれば、子供たちをどかさないと戸を開けるところまでいけないのです。起こさないで戸に近づくことはできなかったのです。

そこで、友人ですが、ここで友人だからということだけでは何かをあげることはしないけれども、「友だちのしつこさのゆえなら」起き上がり、何でもしてあげてください、と言っています。そして、イエスは次に 9 節で、「求めなさい、そうすれば与えられます」という約束をしておられるのです。私がしばしば、神の恵みについて、「図々しくならないといけない」と言っているのはこのためなのです。「自分には、そんな願いをする資格がない」として、遠慮していることがあるのです。しかし、それは神の恵みを貶めている行為なのです。資格が全くないのに、一方的に好意を示しているというのが、恵みの定義なのです！ 私たち人間の世界の中でも、問題がないように見える人と、付き合いやすいですか？何でもかんでもきちんとする人、落ち度がない人、そういった人に同情できますか？意外に、いろいろ世話が焼けて困るような人、個性の強い人、何かに取り組もうと真剣になっている人、そういった人が愛されていきますね。正しい人と、愛される人との間には大きな開きがあります。

にも拘らず、神となると、神は正しい方ですから、自分も正しくないと愛されないとってしまうのです。神は正しい方です、けれども、全くできていない人を敢えて選ばれて、キリストにあって新しい人にするのに最も情熱をかけている方であるのです。神こそが、最もおせっかい、厚かましい、図々しい方です。そんなに駄目になっているなら、あきらめればいいのか？と思う所を、それでも、あきらめずに付き合われるのが私たちの神です。それで、ご自分の独り子を殺すことまでやってしまったのですから、こんなおせっかいな方はいません！ですから、神は私たちにも、同じようにしてほしいと願っておられます。つまり、神の助けを得るのために、大胆にご自身のところに近づいてほしいということです。「ヘブ 4:16 ですから私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、折にかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」

2A 求めることへの約束 9-10

そして三つの命令をし、その命令にともなう、三つの約束をイエスはしておられます。「9 です

から、あなたがたに言います。求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。10 だれでも、求める者は手に入れ、探す者は見出し、たたく者には開かれます。」求めなさい、探しなさい、そして叩きなさいという命令です。その約束がそれぞれ、与えられます、見出します、そして開かれますというものです。

1B 願うこと

初めの「求めなさい」というのは、願い求めるという意味です。願うと単に訳しても良いことばです。お願いするということですが、私たちはこのことを意外にやっていないことが多いです。ヤコブがこの問題を手紙の中で話しています。「4:2 自分のものにならないのは、あなたがたが求めないからです。」とても単純なことです。何か争いを引き起こしたり、妬んだりする時に、その人の心は自分の願い求めを、神に打ちあけていないことが多いです。その願いが、自分の思っているようになえられることはないこともあります。けれども、願うことによって、自分にとって本当に必要なもの、つまり、神が用意されている最善のものを得ることができます。平安がなくて、いろいろなことを行っていたけれども、その行っていることについて初めは祈っていたのに、いつの間にか、それを願いさえもしなくなった。なぜなら、本当に願っていたのは平安だったから、ということがありますね。

2B 求めること

そして、「探しなさい」というのは、神を追い求め、御心を見つけようとするということです。ですので、単に願うこと以上に、「主よ、あなたがここで考えておられることは何ですか？何が正しくて、全きことなのでしょうか？」と尋ね求めることです。モーセが、イスラエルに起こることを前もって告げました。彼らが主に背いて偶像を拝み続けるならば、諸国の民の中に散らされると。「申 4:29 しかしそこから、あなたがたがあなたの神、【主】を探し求め、心を尽くし、いのちを尽くして求めるとき、あなたは主にお会いする。」とあります。自分たちが、そのような状況に置かれている中で、そこでどうして自分たちがこのような中にあるのだらうと、主に祈り、御心を探し求めるのです。これが、「探しなさい」ということであります。

主は、私たちにいつも語りかけておられます。時に痛みを通して、語りかけられます。いや、痛みこそが、主が大きく語りかけるツールとさえなっています。C.S.ルイスは、こう言いました。「神は我々が快樂の中では囁かれ、良心に語りかける。しかし、痛みの中では叫ばれる。耳が聞こえなくなっている世界を呼び覚ますための、拡声器となっているのだ。"God whispers to us in our pleasures, speaks in our consciences, but shouts in our pains. It is his megaphone to rouse a deaf world."」けれども、それでも気づかなければ、さらに痛みをもたらします。そうやって大きく語られていくのです。そう言った時に、主を探し求めさえすれば、必ずやそこにある御心を見出すことができます。

3B 叩くこと

そして、「たたきなさい」であります。これは、神のご臨在の中、祝福の中に入ることです。先週

も言及した詩篇 73 篇、アサフの歌った言葉ですが、神を敬わない者たちが栄えているのを見て妬み、自分が虚しく自分の心を清めているだけではないか、という疑いを持ちました。けれども、「ついに私は聖所に入って、彼らの最期を悟った。」とあります。彼は賛美の導き手ですから、聖所の中に物理的に入って行ったのでしょうか、それよりも、本当に神のご臨在の奥にまで入ろうとしていけば、そこにはまるで違う世界が繰り広げられているのです。神の聖所は外からでは、その輝きが見えません。いや、主の幕屋は貧弱にさえ見えます。けれども、祭壇でいけにえを捧げ、聖所の中に入り、そこで油で燭台を灯し、香をたく、その聖所は金で覆われていて、ケルビムが織り込まれたきれいな幕がかけられているのです。

そして、こうやって祈る中で、主の言われた、「父の御名があがめられるようになる」「御国が来る」が自分のところに実現していきます。

3A 良い賜物 11-13

そして、祈りにはもう一つの不安が付きまといまいます。それは、「主に祈り求めたら、自分が願わないこと、嫌なことが与えられるのではないか？」というものです。薄々、これが御心ではないのか？とあっていて、祈り求めたら、はっきりと示されるかもしれない。けれども、その結果は嫌だ、そんな自分の嫌なことを主は与えられるのか？というような不安です。または、主が祝福されると言っても、そんな話は良すぎるので、かえって悪魔に騙されているのではないか？という不安です。そこでイエス様は語られます。

1B 肉の父 11-12

11 あなたがたの中で、子どもが魚を求めているのに、魚の代わりに蛇を与えるような父親がいるでしょうか。12 卵を求めているのに、サソリを与えるような父親がいるでしょうか。

これに対する答えはもちろん、「いない」ですね。子供が食べたいと言っているものがあるのに、むしろ自分に毒を与えるものを父がくれるはずがない、ということです。とても当たり前です。

2B 天からの聖霊 13

13 ですから、あなたがたは悪い者であっても、自分の子どもたちには良いものを与えることを知っています。それならなおのこと、天の父はご自分に求める者たちに聖霊を与えてくださいます。」

はい、ここが大事です。イエス様は、ユダヤ教の他のラビ、教師たちと同じような教え方をしています。それは、「ましてや」ということです。地上の父親で悪い者がいても、子供が求めていることに悪いものを与えることはしない。ましてや、天におられる良き父は、あなた方に良い賜物を与える、ということです。

それは、聖霊ご自身である、ということです。私たちにとっての最も大きな、神からの賜物は聖霊ご自身だということです。イエス様が父からの約束として与えられると言われました。「ヨハ 14:14 わたしが父にお願いすると、父はもう一人の助け主をお与えくださり、その助け主がいつまでも、あなたがたとともにいるようにしてくださいます。」もう一人の助け主、とイエス様は言われます。今からイエス様は死なれて、甦り、そして昇天されます。イエス様ご自身が彼らにとって助け主でした。けれども、主は天に昇られ、神の右の座に着かれます。その間、主が再び天から降りて来られるまでの間、もう一人の助け主を下さるということです。私たちを孤児のように、独りにしておかれないということです。「もう一人」というギリシア語は、「同じ種類のもう一人」という意味合いがあります。つまり、イエス様の同じ性質を持った方であるということです。神ご自身の霊であり、神ご自身だということです。

1C バプテスマを受けたイエス

イエス様は、水のバプテスマを受けられた時に、聖霊が鳩のような形をして、下って来られました(ルカ 3:22)。それからというもの、御霊の力を帯びて、力強い働きを行われました。そして、イエス様の喜びも、聖霊に支えられたものでした。「10:21 ちょうどそのとき、イエスは聖霊によって喜びにあふれて言われた。」とあります。ガリラヤの三つの町が頑なで、裁かれるという宣告をした後で、それでもイエス様は、父から与えられた弟子たちのことで、聖霊によって喜び溢れたのです。イエス様が聖霊によって、父なる神と交わっておられたように、私たちも交わります。イエス様が聖霊の力によって働きを行われていたのと同じように、私たちも行います。

何が良い賜物なのか？であります。列王記第一と第二のそれぞれに書かれています。第一の始めには、ソロモン王が出て来ます。ソロモンは、主から、「3:5 あなたに何を与えようか。願え。」と言われて、「3:9 善悪を判断してあなたの民をさばくために、聞き分ける心をしもべに与えてください。さもなければ、だれに、この大勢のあなたの民をさばくことができるでしょうか。」とあります。善悪の判断は、知恵と知識に関わりますが、御霊の賜物の特徴です。御霊は知恵の御霊、知識の御霊と呼ばれます。そして、第二のほうですが、エリヤが天に引き上げられようとしています。エリヤの弟子でありエリシャに、エリヤが、「あなたのために何をしようか。私があるところから取り去られる前に求めなさい。」と尋ねました。エリシャは、「2:9 では、あなたの霊のうちから、二倍の分を私のものにしてください。」と答えました。エリヤに働いておられた霊の二倍の分け前でありませう！こうやって、ソロモンもエリシャも、何が最も良い賜物であるかをよく知っていたのです。

2C 悔い改めた者の受ける約束

イエス様は、甦られてから、弟子たちに、「24:49 わたしの父が約束されたものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい。」と命じられました。そして彼らは一つ心になって、エルサレムで祈っていました。五旬節に聖霊が降りました。その約束は、ヨエルの預言のとおり、全ての人に及びました。つまり、私たち一人一人であ

ります。そしてペテロが、そこで聞いていたユダヤ人たちにこう言ったのです。「使 2:38-39 それぞれ罪を赦していただくために、悔い改めて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。この約束は、あなたがたに、あなたがたの子どもたちに、そして遠くにいるすべての人々に、すなわち、私たちの神である主が召される人ならだれにでも、与えられているのです。」聖霊を受ける条件とは、ただ悔い改め、罪の赦しを得ることです。ただそれだけです。後に、使徒 10 章で、コルネリウスとその家族は、ペテロから福音の言葉を聞いてただけで、その場で聖霊のバプテスマを受けていました。そして、聖霊を受けたのだから、水のバプテスマを拒むことはできないとして、順番が逆になりましたが、聖霊のバプテスマの次に水のバプテスマを授けたのです。つまり、これだけ単純なのです。悔い改め、イエスを信じ、罪の赦しを得ている者であれば、求めれば聖霊が与えられるのです。

3C イエスの証し

イエス様は、ご自身が天に昇られる前に、父の約束を強調されました。「使徒 1:8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」聖霊を受ければ、力を受けます。どんな力か？イエス様の証人となる力です。自分の言っていること、行っていることによって、イエス様がおられることを人々が知ることとなります。そんな力です。求めましょう。